

今や夢昔や夢と

女院、大原におはしますとばかりは聞き参らすれど、さるべき人に知られでは参るべきやうもなかりしを、深き心をするべにて、わりなくて訪ね参るに、やうやう近づくままに、山道の気色よりまづ涙は先立ちて言ふ方なきに、御庵のさま、御住まひ、事柄、すべて目も当てられず。昔の御ありさま見参らせざらむだに、おほかたの事柄、いかがこともなのめならむ。まして、夢うつつとも言ふ方なし。秋深き山風、近き梢に響き合ひて、懸樋の水のおとづれ、鹿の声、虫の音、いづくものことなれど、例なき悲しさなり。都ぞ春の錦を裁ち重ねて、候ひし人々六十余人ありしかど、見忘るるさまに衰へ果てたる墨染めの姿して、僅かに三、四人ばかりぞ候はるる。その人々にも、「さてもや。」とばかりぞ、我も人も言ひ出でたりし。むせぶ涙におぼほれて、すべて言も続けられず。

今や夢昔や夢と迷はれていかに思へどうつとぞなき

仰ぎ見し昔の雲の上の月かかる深山の影ぞかなしき

花のにほひ、月の光にたとへても、一方には飽かざりし御面影、あらぬかとのみたどらるるに、かかる御事を見ながら、何の思ひ出なき都へとて、されば何とて帰るらむと、うとましく心憂し。

山深くとどめおきつるわが心やがてすむべきしるべとをなれ

【口語訳】

女院が、大原にいらっしやるということだけはお伺い申し上げたけれども、適当な人の案内がなくては参上することのできる方法もなかったのだが、（女院を）深くお思い申し上げるわが心を道しるべとして、無理矢理にお訪ね参上したところ、（女院のお住まいに）次第に近づくにつれて、山道の様子からしてまず涙が真っ先にこぼれてなんとも言いやくない上に、（女院の）御庵室の様子、お住まいの実態など、生活のありさまは、全くまともに見てはいられない（ほどにひどい）ものである。（栄華を極めた）昔の様子を拝見しない人ですら、（今の）このだいたいこのありさま（を拝見して）は、どうしてこれを普通のことと思うだろうか。まして、（私は昔のご様子を拝見しているのであるから、このような今のご様子は）夢だとも現実だとも何とも言いようがない。秋色の深まった山から吹き下ろす風が、近くの梢に響き合って、懸樋から流れ落ちてくる水の音、鹿の声、虫の音（などが聞こえてくるのも）、（秋の山里では）どこでも同じことなのだが、（今の私には）例のない悲しさである。都では（わが世の春を謳歌して）美しい着物を着重ねて、お仕えていた女房たちが六十人余りいたけれども、（ここにはそういった過去の姿を）見忘れるほどに衰えた尼姿で、わずかに三、四人だけがお仕えておられる。その人々とも、「それにしても、まあ」とだけ、私も相手の人も言い出した。（しかし、）むせぶ涙でいっぱいになって、まったく言葉も続けられない。今が夢なのだろうか、それとも昔が夢だったのだろうか、つい心は迷ってしまって、どのように考えてもとても現実のこととも思われません。

その昔、宮中で拝見しました中宮様が、このような深山にお住まいのご様子を再び拝することは悲しいことでございます。

（春の）花の美しい色つや、（秋の）さやかな月の光にたとえても、そのどちらか一方だけでは十分に表せないように（お美しかった女院の）ご容貌も、別のお人ではないかとばかり（衰えていらして）それからそれへと昔のことが回想されるにつけ、このような（おいたわしい）ご様子を拝見しながらも、なんの（楽しい）思い出もない都へ、ではなぜ私は帰るのだろうか、（我ながらいやなことよ、と）心憂く思われる。

この深山に深く残しておいた私の心よ。私そのままここに出家して住む手引きとなっておくれ。